うまれてきたよ

はやし　ろみ

ここは、赤ちゃんが 生まれる前に いたところ。
おひさまと おつきさまが、やさしく 見守っています。
赤ちゃんは、たのしく あそんだり
しずかに ねむったり しています。

赤ちゃんは、ときどき いずみを のぞきます。
すきとおった きれいな きれいな いずみです。
そこには、いろんな人が うつります。

「わたし、あの人たちの ところへ 行きます」
と、赤ちゃんが おひさまと おつきさまに 言います。
おひさまと おつきさまは、ひとつだけ 運命を 教えてくれます。
そして、赤ちゃんは いずみの中の道を 歩いていきます。
お母さんと お父さんの ところへ 行くために。

あるとき、ひとりの 赤ちゃんが 言いました。
「ぼく、あの人たちのところへいきます」
赤ちゃんは、
やさしそうな ごくふつうの ふうふを
見つめていました。

おひさまと おつきさまは
おだやかに 運命を 言いました。

「あなたは、お母さんの おなかの中で、
あの世界での 命が おわってしまうのです」

赤ちゃんは こたえました。
「わかりました」

そして、おひさまと おつきさまに
見守られながら、
ひとりで ながい ながい 道を
たどっていきました。

「赤ちゃんが おなかに いますよ。
予定日は、7月ごろに なるかな？」
先生が お母さんに 言いました。

「ほんとですか？」
お母さんは、ドキドキして にっこり わらいました。

まだ、赤ちゃんが 小さすぎて おなかにいるなんて わかりません。
だけど、お母さんは 思いました。
何があっても、この子に 会いたい 守っていこう と。

その夜、
仕事から 帰ってきた お父さんは、
お母さんの おなかに だきついて
「やったあ！やったあ！」
と、さけびました。

それから、しばらくして
お母さんは つわりで、だんだん 具合が 悪い日が ふえました。
ぐったりして、なんにも 食べたく ありません。

お父さんは、お母さんが 食べられそうなものを聞いて
用意して くれました。
それから、そっと
ねかせて あげました。
お父さんは、
ひとりで ごはんを
食べました。

さびしいけれど、
お母さんと 赤ちゃんが
がんばって いるのです。
お父さんは、
ねむっている お母さんに
「あいしているよ」と 言いました。

つわりがおさまると、
お母さんは もりもり ごはんを たべました。
少し多めに 鉄分を とらなければ
いけないと 先生が 言ったので、
苦手なレバーも、がんばって食べました。

おなかのなかで、
赤ちゃんは 聞いていました。
お父さんと お母さんの声が、
だいすきでした。
おなかの なかは
きもちよくて、
えいようも
いっぱい とどいて、
とっても
しあわせです。
うれしくて うれしくて、
赤ちゃんは うでとあしを
思い切って
うごかして みました。

ぴくん。

「あっ、動いた！」

「元気な男の子ですね。」
先生に 性別を 教えてもらった日、
お母さんと お父さんは さっそく
名前を 考え始めました。
「こんなの どうだ？
かっこいい 名前だろ！」
「そんなの へんだわ。
いつかは、大人に なるのよ！
まじめに 考えて！」
つけたい 名前が いっぱいで、
ちょっぴり けんかになった
お母さんと お父さんでした。

お母さんは おなかが 大きくなる前に、
赤ちゃんを お世話する 準備を始めました。
お父さんは、重たい ベビーベッドを がんばって
組み立てました。
「今日も 元気に けってるの。
お父さんのおてつだいを
したいのかもね！」
「3人で 公園に行こうな！」
たくさんお話をしてもらって
赤ちゃんはしあわせでした。

だけど、その日が やってきました。
朝から お母さんは、赤ちゃんが あまり 動かないのを ふしぎに思いました。
「どうしたんだ? ねんのために 病院、いっとこう。」
お父さんは お仕事に おくれることを会社に電話して、病院へむかいました。

先生が けわしい顔をしました。
それから、しぼり出すような か細い声で 言いました。
「赤ちゃんの 心ぞうが 止まっているようです……」
お母さんも お父さんも、時間が 止まってしまったようでした。
「今すぐに 理由は わかりません……ざんねんです。すみません。」
二人は 声も出なくなり、なみだが 止まりませんでした。

もっと 気をつけていればよかった と、お母さんは、自分をせめました。

もっと やさしくすればよかった と、お父さんは、自分をせめました。

赤ちゃんを、ずっと おなかの中に おいてはおけません。
赤ちゃんは 心ぞうが 止まったまま、おなかの 外へ 出てきました。
赤ちゃんは なきません。
そのかわり、お母さんが ないていました。
となりでは、お父さんが ないていました。

助産師さんが 言いました。

「こんにちは、赤ちゃん。
ねえ、生まれてきてくれたよ。
お母さん、お父さん、ごらんなさい。」

お母さんは、よわよわしく
首を 横に ふりました。

「とっても、きれいな子よ。
がんばって、会いに来てくれたんだから
だっこして あげなくちゃね。」

助産師さんが、赤ちゃんを お母さんの手に そっと あずけてくれました。
お母さんは こわごわ、目を開けました。
手の上にのるくらい、小さな 赤ちゃん。

「なんてかわいい子なの……こんにちは、お母さんですよ。」
お母さんは心から赤ちゃんをかわいいと思いました。

「わあ、ぼくに にてるなあ……
小さいのに 指も ちゃんと 5本あるよ。」
お父さんも、手のひらで 赤ちゃんを だっこしました。
助産師さんが、「お名前は決めてある？」と聞きました。

お母さんとお父さんが、
声をそろえて
名前をよんでくれました。

こんなに かわいいって 言ってもらえて、ぼく うれしいな。
すてきな お名前を もらえて、うれしいな。
元気に生きて うまれられなかったけれど、ぼくは ずっと 生きていたんだ。
おなかのなかで。
お母さんと お父さんの 声が 大すきだよ。
おさんぽする時の トッコ トッコ っていう リズムが 大すきだよ。
ほんとはね、お母さんが よく聞いていた音楽で おどっていたんだよ。
心ぞうが 止まる時まで、ちゃんと お母さんと お父さんに 育てられてきたんだ。
ぼくは、ずっと 生きていたんだ。
わすれないでね。
これからも、ぼくは ずっと 二人の中で 生きていきたいんだ。
お母さん、お父さん、あいしているよ。

赤ちゃんは 気がつくと、
おひさまと おつきさまの そばで ねむっていました。
「すてきな命でしたね」
おひさまと おつきさまが 言いました。
赤ちゃんは「はい」と答えて、また 少し ねむりにつきました。

―生きて生まれられなかった子は、忘れられてしまうのでしょうか―

この問いが、私の中にずっとありました。死産や流産は、医学の進歩や衛生環境の整備、栄養の改善などに伴って減りました。ですが、なくなった訳ではありません。単に、語られていないというだけです。

そんなとき、『誕生死』という本に出会いました。この本には、流産や死産で小さな我が子を亡くした、親の経験と思いが綴られていました。

また、この本では赤ちゃんの気持ちに寄り添いたいと書かれていました。物言わぬ赤ちゃんの気持ちはわかりません。でも、最愛の我が子のことを無理に忘れることはなく、また誰にもその権利を奪うことはできないと強く思いました。

悲しい絵本になってしまうかもしれない。

書こうか、やめようか。

とても悩みましたが、描いてよかったと思っています。

誰か、必要とされている方へ…この絵本が届くことを願って。

はやし ろみ

奈良県出身。

小さい頃から想像とお絵描きが好きでした。

高校卒業後、看護学校へ進学。卒業後、看護師をしつつイラストを描きアートフェスやグループ展・個展などで作品発表をしています。

3人の娘を育児するうちに、「子供たちのために一生を捧げられたら素敵だな」と思い、子供のためのイラストを描くように。さらに、看護資格を生かして産科にも飛び込みました。今回の絵本は、産科での経験や、自身の妊娠と出産や育児をする中での思いを一つの形にできたと思います。